

# 女優、83歳の演じる放浪画家の魂

松本侑壬子・ジャーナリスト

こんなすばらしい人がいたことなど、全然知らなかった！ という人物について、その死後伝記や小説や報道で知ることがある。中でも映画は記録映画であれ劇映画になったものであれ、映像で具体的に描かれるので、とりわけ印象が強烈だ。

この映画の主人公ニキフォル（1895-1968）は、ポーランドの素朴派の画家である。晩年の、入院を含むほんのわずかな期間以外は生涯を路上で暮らし、後に世界的に有名になってからも、名声にも金にも目もくれず、ひたすら観光客に売るための絵葉書のように小ぶりの絵を描き続けた。絵の教育など受けず、自分の内なる魂の命ずるままに自由に描く絵一筋の人生は、家も家族もなく貧しく病弱で孤独だったが、自分の絵に対する妥協のなさ、誇り、愛は、絵からオーラとなって迸る。そんなニキフォルの晩年を、すべてを投げ打って支え伴走した一人の愛ある凡人の目で描いている。

1960年、社会主義政権下時代のポーランド。南部の保養地クリニツァは湯治客相手の観光収入に頼る田舎町。市役所管理部の美術担当者マリアンは、自身画家として事務所の建物の一角に小さなアトリエを持っていた。その小部屋に、ある日、小さな旅行かばん一つの小柄な老人が入ってきて、勝手に居座り、絵を描き始めた。変人の放浪の画家として既に街では有名なニキフォルだった。言語障害があり、読み書きができないニキフォルを誰もまともな人間としては見ず、少し頭のおかしい物乞いとして物笑いの種にしていた。

周囲の目などまったく気にせず、自分の思うままに描くニキフォルの絵は、一見子どものいた

ずら書きのように見えながら、実は純粋な芸術性を内包していることをマリアンはすぐに見抜く。逆にニキフォルはマリアンの教養主義的な作品を「駄作だ」「お前は絵を描くな」と遠慮会釈ない。腹を立てながらも一方でそれが凶星であることを一番わかっているのもマリアン自身である。自宅の物置を提供し、そこで絵を描かせようとするが、ニキフォルの展覧会が新聞に取り上げられると手の平を返したような上司の命令で、再び市役所内のアトリエをニキフォルに提供するマリアン。

至近距離から天才を見つめる凡人のまなざしは、憧れと嫉妬と善意の入り混じった複雑なものである。が、例えばモーツァルトを見つめたサリエリの悪意とは違って、マリアンは善意の人であった。ニキフォルの出自を調べるために方々を訪ね歩く旅は、二人にとってはまるで親子か師弟のような心楽しいスケッチ旅行になる。ニキフォルは相変わらずマリアンの絵をけなしながら「色を決めるときには、まず色によく聞け」と絵の極意を伝授する。こうしてやっと生活が安定してきたとき、ニキフォルの健康は既に体の奥深くまで蝕まれていた…。

ひょうひょうとした中にも毅然とした矜持<sup>きょうじ</sup>と何とも愛すべき無邪気さを併せもつ放浪の天才画家。一度見たら忘れられない強烈なその人物像を演じているのは、何と83歳の女優クリスティーナ・フェルドマン。もう男とか女とかを超えたニキフォルという永遠の人物像を、演技とは思えないほど自然に私たちの脳裏に刻み付ける。ここではジェンダーの問題は軽々と超越している。



ポーランド映画 (100分) / クシユトフ・クラウゼ監督

## 『ニキフォル ~知られざる天才画家の肖像』

11月3日より東京都写真美術館ホールほか全国にて順次公開

